

第2表 論文中の術語の書き方例

1) 表題に用いる術語は不明瞭な省略語は用いない。

たとえば“………脱酸, 脱硫作用……”とし, “………脱O, 脱S……”は不可

2) 本文にて最初に述べる術語は, 内容の十分理解できる親切な表現を用いること。

たとえば“………生じた Hercynite($\text{FeO} \cdot \text{Al}_2\text{O}_3$)は………”

“平衡定数 K , Gibbs の自由エネルギー G は………”

“マグネタイト (Fe_3O_4) を N_2 を含む CO で還元した結果, Fe_3O_4 は………”

“シリカ・カプセルをかぶせた低炭素鋼板を管状炉内で加熱したが, ほとんど脱炭しなかった。”

3) 本文にて繰返し用いる場合は化学記号, その他のすでに認められた省略記述でよい。

たとえば溶鋼中の成分 (無限稀積液標準の場合) は C , O で表わし

“ ” “ ” (純液規準の場合) は $[\text{Ni}]$, $[\text{Fe}]$ などで表わす

また, たとえば, 文中に「オーステナイト」の語が多数出てくるときは, その最初のところで「オーステナイト(γ)」として以下「 γ 」を用いてよい。

4) 学術技術の進歩とともに日本語訳では十分表現できない言葉が次第に増してきているから, 下記の例のようにカナ書きとして術語を表わす。しかし意味のピッタリした簡明な日本語訳のある場合は慣用に従つてなるべく日本語を書くことを原則とする。次に例を示す。

i) カナ書きが妥当と思われるもの

- ガス, エネルギー, プロパン
- リムド鋼, キルド鋼
- ポテンシャル
- 窒化アルミニウム AlN
- ニオブ, タンタル
- グラファイト
- (エレクトロンプロブ) X線マイクロアナライザー
- ベアリング, または軸受
- オーステナイト, フェライト, ベイナイト, インゴット, ビレット, フープ, パス, スケール, ステンレス鋼, クリープ, プレス, ロール, ブルーム, ブローホール, キャンバー, カーボメーター, セメントタイト, 板のクラウン, フェロアロイ, フランジ, ガイド, ジョミニー試験, マクロ腐食, マンドレル, マルテンパー, マルテンサイト, ノッチ, オーバル, ポリゴナイズ, スクラップ, セミキルド鋼, シャー, スラブ, スラッグ, ストリップ, タンデムミル, ビッカース硬さ (硬度計)

備 考

日本語になりきつている
慣用の期間が長く, ピッタリしたよい訳がない
ピッタリした日本語訳がなく慣用している
窒化アルミの形は用いない
または Nb, Ta (通常 Cb は用いない)
または黒鉛
略記としては EPMA, XMA などが慣用
“メタル” は不可 (混同しやすい)

鉄冶金慣用語の例

ii) 原語を一度書き添えることが妥当だと思われるもの

- フォーミング (foaming) } フォーミングは forming もあり混同することもある
- パージング (purging)
- フラッターリング (fluttering) } 日本語に十分慣用されていない
- スカルピング (scalping)

iii) 省略的記述の例

- 78Ni-22Fe 合金 } 18-8 ステンレス鋼の場合は慣用によつて Cr, Ni 省略
 - Ni-Cr-Mo 肌焼鋼
 - Ferro-Si-Zr
 - 5% nital, picral など
 - JIS-SUS 31
 - U.S. Pat. 1,932,566
 - Hb 100, HRC 50
 - HNO_3 (5%)
- フェロアロイの場合を表わす
化学記号表示の必要はない
AISI, DIN, En その他同様
米国の慣例による
ブリネル, ロックウェルC 硬度値
分析の場合など “硝酸水溶液” に慣用